10/10/2018

日本・アジアのキリスト教――賀川・徐・栗林――

芦名定道

＜前回：オリエンテーション＞

演習日（後期・水３）：10/3, 10, 17, 24, 31, 11/7, 14, 21, 28, 12/5, 12, 19, 26, 1/9, 17
場所：キリスト教学研究室

・初回の授業では、本演習のオリエンテーションを行い、演習の目的や進め方を確認する。３回目以降は、栗林輝夫、賀川豊彦、徐南同のテキストを、担当者の解説を通して、順番に精読してゆく。
・10/3：オリエンテーション＋導入（本日）
・10/10：賀川研究から＋担当者確定（テキストの配布）
・10/17, 24, 31, 11/7, 14, 21, 28, 12/5, 12, 19, 26, 1/9, 17：演習
・毎回担当者が、テキストの内容を説明し、問題提起し（テキスト外の資料などを合わせて用いる）、議論を行う。担当者はレジメを用意する。残った問題は宿題とする（次回の冒頭で報告する）。
・必要な解説を行う（芦名）。
・成績はゼミでの発表（少なくとも一回）によって評価する。

＜テキスト＞

・賀川豊彦『賀川豊彦全集４』（キリスト新聞社）
・徐南同『民衆神学の探究』（新教出版社）
・栗林輝夫『日本で神学する』（新教出版社）

＜賀川豊彦の略歴的説明＞　（『岩波キリスト教辞典』の項目・金子啓一）

・1888-1960。神戸で生まれ、父母の病死で徳島で育つ。
・キリスト教社会運動家、伝道者。
・宣教師マイヤース（南長老ミッション）に出会い受洗、明治学院、神戸神学校で学ぶ。
・肺結核で死の宣告を受ける。
・1909 年、貧民伝道・奉仕のため、神戸新川スラムに転居。女工のハルと結婚。
・関西労働同盟会結成、神戸川崎造船大労働争議の指導。
・日本農民組合、消費組合（神戸購買組合→コープこうべ）の設立。
・1914-17：渡米、プリンストン大学、プリンストン神学校。
・1919 年、日本基督教会の牧師資格（麹町教会）
・神の国運動（1929-1932、33-34）の全国展開。
・第二次世界大戦後、日本社会党結成に協力、イエスの友会、キリスト新聞社を興す。
・『死線を越えて』（1920）
・没後、『貧民心理の研究』（1915）の差別記述、戦時中の軍部への協力が問題となる。

＜賀川豊彦の「友愛の政治経済学」＞

０．賀川豊彦『友愛の政治経済学』加山久夫・石部公男訳、日本生活協同組合連合会、2009年。Toyohiko KAGAWA, *Brotherhood Economics*, Harper & Brothers, 1936.

１．「序文」

・「今日」「キリスト教の教えが挑戦を受けている時代」、「信条が重要ではないというのではなく」「社会での贖罪愛の適用が必要なのである」、「生産者と消費者との間の溝を兄弟愛をもって架橋しなければならない」、「物質主義的資本主義と物質主義的共産主義は共に放棄されねばならないのである」、「心理的ないし意識的な経済を通して新しい社会

秩序に至る新しい道を見出そうと試みた」(17)
・「1936 年 4 月、コールゲイト・ロチェスター神学校のラウシェンブッシュ基金の招きで「キリスト教的友愛と経済再建」という表題のもとに４回にわたって行なった講演」(18)
２.「第１章　カオスからの抜け道はあるか」
・「世界は混沌とした状態にある」、「今日の貧困は物の欠乏によるのではなく、豊富さから生じている。物財や機械の過剰生産、過剰な労働や知識層の存在からくる苦しみである」「富はごく一握りの人々の手に集積し、社会の一般大衆は、失業、不安、従属、不信の世界に蹴落とされている」、「レッセ・フェール政策」(19)
「今日のキリスト教会が人間の生活全体を満足させる福音を説いてはいないことを告白しなければならない」、「教会が近代において愛の実践の使命を果たしていたなら、マルクス主義が現在の規模にまで拡大するわけはなかったであろう」、(21)
・「日本の人々はいまなおキリスト教にたいして著しい偏見を持っている。いわゆるキリスト教国はいまなお東洋諸国を経済的・政治的に侵略しており、私たち東洋人にキリスト教国たいする古来の偏見を呼び覚ましている」(22)
・「消費協同組合、質庫信用組合、学生信用協同組合を組織した」、「これはキリスト教的兄弟愛の実践にほかならない。日本は変わりつつある。」「「日本では、キリスト教徒の数は少ないが、キリスト教の影響力は、今日、強くなってきている」
・「唯物論的な共産主義とキリスト教批判に、率直に向き合わねばならない」(30)
「ニュー・ディールの「管理資本主義」」「資本主義は、改善された形であっても、恒久的な社会秩序に属するものではないこと」「資本主義は自由競争の原理に基づいており」、「収奪システム」、「僅かな人々の手中での資本の蓄積」「上流階級ないし有閑階級を産み出す」(32)
３.「第２章　キリストと経済」
「Ⅰ　主の祈り」
「ある人々は、キリスト教の真の実体は全く宗教的であって、経済生活と何の関係もない、と言う」、「もちろん」「違いはある」、「しかし、キリストはそのような態度をとってはいなかった。彼はしばしば、経済の基本的な事柄を取り扱っている」、「食事」「食卓」「日ごとの糧への祈り」(34)
「キリストは経済について素晴らしい教えを与えてくれているのだ」(36)
「II　価値の７要素」
「肉体労働の価値は生命の保全と密接に結びあっている」(37)、「失業者といえども搾取されてはならず、雇われると時には、生活給が保証されるできだ、とイエスは主張する（マタイ xx.1-16)」(38)
「イエスは、銀行に言及し、利潤やそれが生む利息について述べている」(38)、「彼は、この注目すべき成長という価値原理について私たちの意識を呼び覚ます。イエスが指摘しているように、成長の法則は自然の中にある」(39)
「変化や成長が容易に行なわれることは、資本主義文化の特徴である。しかし、単なる変化や成長は必ずしも幸福をもたらすものでも、人格の成長に貢献するものでもない」(39-40)、「選択という価値の第５の要素」「選択を対象とする経済が存在してくる」(40)
「経済生活が、神の目的を成就すべき宗教生活と一致しないとき、その大切な意味を失うと、イエスは述べていたのである」(41)
「III　十字架の愛と経済の価値」
「キリストの贖罪愛は社会全体を救うための個々人の魂の救いを意味する」(42)
「ソーマは民族の全体や社会の全体をも意味する」、「十字架を背負う愛が社会経済の原理であると認められるならば、個人の所有権や相続権はすべて神と社会に献げられるものとなり、利潤や収益はすべて神に属するものと解され」、「より大いなる社会愛」(44)
「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、

信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることそれ自体が人間の活動を要求する」、「神の呼び起こされた愛の結果」(45)
「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである。この愛は、人間の意識のチャンネルをとおして流れ出るが、神の意図に従っている」、「愛の可能性への信仰」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない」(46)
「IV　パウロの経済価値の観念」
「キリストは神を第１にしたが、そうすることで、経済を無視することはしなかった」(48)
「キリストの死後、宗教的共産生活において実践に移された。パウロの 13 の書簡を学ぶと、初期の教会が愛他的な労働経済を実践していたことがよく分かる」(49)
「V　贖罪愛と経済革命」
「今日、多くの教会はその贖罪愛をもっぱら信条的なものとして保持することによって、楽な思いをしようとしている」(52)、「残念ながら、教会組織の大半は、不当利得社会の特権階級に依存している」、「キリスト教会の存在がなぜ脆弱で、現代世界の騒乱になかで教会がなぜ無力なのか、を明らかにする」(53)

４.「第３章　唯物論的経済観の誤り」
「I　唯物論的経済観の無力性」
「アダム・スミスによる宗教と経済の分離は一時期成功したかに見えた」、「しかし」、「宗教と経済の二つの領域は一緒になり、一体として動くのでなければならない」(54)
「過去の過ち」「それは経済が人間の意識から独立していると想定し、経済学を記述的な科学として取り扱ったことにあった」、「あまりにも自然主義に傾斜したため」
「マルクスは、経済学を自然科学として取り扱うことができると考え、すべて唯物論的決定論で分析できるとする特殊な方法論を擁護したのである」、「この時期、経済学者と同様に、神学者も、経済学は自然科学の領域に入れられるべきだと考えていたのだからである」
「経済行為は、人間の意識の発展レベルとともに変化する、と私は信じる」、「１国の文化はそう容易には説明されない」(55)、「単なる物質生産様式だけに基づいて文化的社会を定義しようとするのは、大きな誤りである」(56)
「II　社会的意識の覚醒」
「人間の精神的な目覚めが発明や発見をとおして、私的所有権や遺産相続や契約権などの概念に基本的・革命的な変化をもたらす」、「プロテスタンティズムは」「資本主義的文化の勃興に道を開いたのである」(56)
「16 世紀の契約や相続の概念の基本原理は、大規模な大量生産の利用によってもたらされたカオスのなかで失われ、新たな賃金奴隷階級を創設することとなった」「社会正義の感覚の喪失」(57)
「III　心理的経済」
「自覚的な社会意識は生産と消費という二つの角度から発展してきた。経済心理の動きは、以前には夢想だにできなかった先物買いの操作を考案した」、「まだ存在しない物を取り扱うのである。貨幣の流通は人間の信用意識に依存している」
「唯物史観の概念は、従前の社会を説明するのには役立ったかもしれないが、時間を含む心理的経済を取り扱う社会経済的社会の現象を説明するためには役に立たない」、「かくして、唯物論的経済は心理的見解に席を譲っていかねばならない」(59)
「連帯性を欠く民族は株式会社をつくることができない」、「互助の意識が発展していない社会では、時間を含む交換のすべて、それに心理的な公正を要する不動産市場とか株式市場とかは不可能になってくる」(60)

「IV　身体、感覚、意識の経済」
「経済的な欠乏が心理的であるという事実」、「経済のさらなる心理的文脈」、「人間の欲求」（60）
「「身体経済」は「感覚経済」に進展する」、「「感覚経済」は」「「意識経済」と呼ぶものに進展する」、「人間の関心は感覚的満足のレベルから知的レベルへと進む」
「追憶の感情を満たすために、私たちはあらゆる種類の記念碑や記念品をつくる」（61）
「唯物論では現代社会の再建の問題は解決できない」、「唯心論的な経済史観」、「ある時代の文化は、物質的な生産・分配・消費の形態を発展させ制御するその時代の人々の意識生活の覚醒度によって、決定される」（63）
「V　資本と労働」
「自然の土地はそのままでは人間の生活には価値を持たない」、「社会的な心理がその価値に作用し始める」（63）
「VI　原始的文化の精神的基礎」
「共通言語」「ギルド」「キリスト教的な友愛関係」（66）
「VII　機械文明史の唯心史観」
「マルクスの唯物史観には根本的な訂正を加える必要を感じる。社会的エネルギーの表象である貨幣の力は、確かに、物質的な事柄とされてよい。人間の貪欲として知られる心理的要因が、考えに入れられねばならない」（67）
「マンモニズムは強欲な自己中心的現実主義を意味する」、「資本主義を純粋に唯物的と考えるのは大きな間違いである。そこに横たわっている心理的側面はずっと重要である。資本主義のシステムは、結局、自己中心的な搾取のシステムにほかならない」（68）
「VIII　宗教的価値と経済的価値の結合」
「生命、労働、変化、成長、選択、秩序、目的という七つの類型の価値は、人間の意識の発達により発展する」、「客観的世界と主観的世界を連結する七つの通路」、「チャールズ・ダーウィンの進化の世界はこれらの価値の七つの類型の法則を認めている」
「経済的な価値は主観的ならびに客観的な価値から分離されたものではない。それはむしろ、人間の意識活動全体の基礎なのである。意識経済を拒否するどんな経済観も、十分ではない」（69）
「共産主義と科学的社会主義はともに、宗教的な概念に関わるある宇宙観を持つ」、「さまざまなイズム」「の創始者や賛同者は、それぞれの仕方で、宇宙におけるある種の宗教的価値の形態を追っていることを、見落としてはならない」、「彼らのうちに宗教のある面への類似性を見ることができよう」
「唯物論的経済学と唯心論的経済学」「本質的な違いは」「一方が決定論的宇宙観を選び、他方が可能性への信仰に基づく目的論的見解を選ぶところにある」
「今日のように、人間の意識が目覚めた時代においては、人間の交換行為と人生の目的は分離され得ない」、「私たちの次の段階は」「経済的価値である交換価値を宗教的にしていくこと」、「協力の経済が社会的連帯の意識に基づいていること」、「この機械文明を今一度精神化する力」（70）

５.「第４章　変革の哲学」
「I　暴力革命」
「暴力革命が、経済革命を遂行することに失敗した七つの理由」（71）
「II　経済革命」
「人間の意識の革命」「所有権や相続や契約権と関係のある富や職業に関する理念に根本的な革命が生じなければならない。これらの考えの革命が宗教的意識に基礎づけられ、それが社会的意識を構成するまでに発展するときに、経済革命ははじめて完全に実現される」（74）、「真の経済革命は、キリストにおけるごとく、いのちについての目覚めた意識が社会化されるときにのみ達成される」（76）

６.「第５章　世々を貫く兄弟愛」
「I　愛の実践」
「キリスト教史の最たる特徴は兄弟愛の展開である」、「愛餐の物語」、「愛餐は特に失業した人を助けるために企てられたものであった」「失業者を救済する義務」、「魚とパンの食事」（77）
「II　修道会」
「６世紀以前については詳しくは分からないが、真のキリスト教的兄弟愛を明らかにする修道院との連関で、多くが保護され展開されていたこと」、「現在のセツルメントのような働き」（79）、「いわゆる「暗黒」時代におけるキリスト教の進展の事実は、キリスト教的友愛運動だったキリスト教的労働者ギルドと関係があると考える」（80）
「III　ゴシック建築とキリスト教的兄弟愛」「IV　再洗礼派の運動」「V　プロテスタント自由主義」
「VI　キリスト教的友愛の経済実践」
「キリスト教的友愛の発展史」「ほとんど例外なく、労働は尊重され、金銭への利子は許されなかった」（85）

７.「第６章　現在の協同組合運動」
「Ｉ　開かれたコミュニティを」
「現代の協同組合は、中世の組合（ギルド）の延長線上に改良され発展してきた」、「中世のギルド」「その組織は非組合員にまで兄弟愛を及ぼすことはなかった」、「真の協同組合の基本原則の一つはそのサービスをコミュニティ全体へ広げることである」（87）
「II　ロジデール・システム」「III　ライファンゼン・システム」「IV　日本における協同組合運動」
「V　強制協同組合」
「収奪の無い計画された経済の体系」、「徹底した教育運動から始めなければならない」、「意識的な自覚と自発的な行動なくしては、協同組合運動は達成されない」（93）
「VI　協同組合運動に対する反対」
「移行のプロセスは、だれにも苦難を及ぼさないよう、極めてゆっくりとしたものとなるだろう」、「資本主義的なやり方から協同組合の方式へと、考え方を変えなければならないのである」（96）
「VII　精神的運動としての協同組合」
「協働組合経営は組合員の宗教的な社会意識の目覚めに依存するであろう」（98）、「友愛意識の復活、キリスト教的兄弟愛の復活」（99）

８.「第７章　兄弟愛の行動」
「I　多様な互助組織の必要性」
「今日存在するのは資本主義である。資本主義は無限に自然資源がある間はまだよいが、私たちが自然の資源を使い果たしてくると、悲惨と貧困の恐ろしい状態が起こる。そうなると、生活を護り、経済状態を適正に公正に調節していくために、兄弟愛の運動が不可欠となる」（103）
「II　保険協同組合」「III　生産者協同組合」「IV　販売者協同組合」「V　信用協同組合」「VI　共済協同組合」「VII　利用協同組合」「VIII　消費協同組合」

９.「第８章　協同組合国家」
「I　協同組合国家の精神的基盤」
「友愛意識の覚醒の程度」、「贖罪愛の精神的基盤がない限り、成功の可能性はほとんどない」（128）

「II　協同組合国家」「III　協働組合連盟」「IV　産業議会」「V　社会議会」「VI　内閣」「VII　選挙」「VIII　警察制度」「IX　資本主義から協同組合へ」「X　私有と個人企業」「XI　慈善と教育」

10.「第９章　友愛に基づく世界平和」
「I　戦争の原因となる経済」
「縮小してゆく地球上で国民間の争いを続けるのは不毛なこと」(148)
「宗教的対立によって惹き起こされた戦争もあった」、「世界平和に対する脅威として現存する状況は大部分が経済的なものである」「人口過剰」「自然資源の欠乏」「国際金融の問題」「貿易政策の摩擦」「輸送政策の摩擦」(149)
「最近の農業不況の原因は、食物の生産過剰によるものであった」、「世界列強がよき隣人国として共に手を結ぶならば、人類が飢えるような事は決してないであろう。誠に残念なことであるが」(150)
「II　ロイド海上保険協会を見よ」
「III　協同組合貿易と世界平和」
「国際信用銀行」(154)、「諸国民を教育していく問題に帰着」(155)
「IV　国際経済会議」
「経済連盟」(156)
「V　国際協同組合」
「現在の傾向は、弱い国々の窮乏を利用し、それらの国を足下に踏みにじることにある。これは、個人に対してであれ、国に対してであれ、キリスト教的態度ではない」(158)
「VI　結論」
「猜疑心」「軍備に莫大な支出をしている」、「私たちの意識において経済がまだ精神化されていないからにほかならない」
「経済活動のすべてを、贖罪愛の意識的行為によって浄化し合理化すること」(159)
「世界の経済体制を「協同組合化」する努力をいますぐ始めよう」(160)

11. 賀川研究の課題
・これまでの研究領域（実践的側面に偏る）を拡大し深めること。
・理論的（経済理論、教育論、科学論・宇宙論・生命論・・・）あるいは神学的側面を取り上げる必要がある。
・賀川を思想の中に位置づけること。

＜参考文献＞

１．雨宮栄一『青春の賀川豊彦』(2003)、『貧しい人々と賀川豊彦』(2005)、『暗い谷間の賀川豊彦』(2006 年)新教出版社。
２．ロバート・シルジェン『賀川豊彦――愛と社会正義を追い求めた生涯』新教出版社、2007 年。
３．阿部志郎・雨宮栄一・武田清子・森田進・古屋安雄・加山久夫『賀川豊彦を知っていますか』教文館、2009 年。
４．賀川豊彦記念松沢資料館編『日本キリスト教史における賀川豊彦』新教出版社、2011 年。
５．C・H・ジャーマニー『近代日本のプロテスタント神学』日本基督教団出版局、1982 年（原著・1965 年）
第二章「近代における日本自由主義神学とその社会に対する関心」
海老名弾正（一八五六―一九三七年）
大塚節治（一八八七年生まれ）
賀川豊彦（一八八八―一九六〇年）

＜「社会革命と精神革命」1948 年、清流社＞

A．編集者「解説」（497-499 頁）

・新日本建設キリスト教運動（1946/7 ～）の講演集。
・賀川の愛国心のほとばしり
・アメリカ軍占領後の 3 年目。
　敗戦の窮迫状態（インフレ、物資坪即、食糧難）、共産党の抬頭・ゼネスト
　不安、将来への希望を失ったとき
・日本社会の改革。心の内から、暴力による革命ではなく、精神革命による日本の再建
・愛国者賀川、祈り（罪から救われ、道徳的にすぐれた民族、経済的にも豊かな国）
・第一章：敗戦と食糧不足と政治の貧困には革命がつきもの、日本は精神革命によって社会を変革すべし
・第二章：再建日本の精神的基盤、発明発見と信仰、アシジのフランシス、ラスキン、オーストリア・北欧・スイス
・第三章：社会革命と新道徳、十字架意識をもち道徳的基礎を確立
・第四章乃至第七章：宗教講演
　　自然の秩序を通して、宇宙は神の衣裳、歴史を通して
・第八章：日本再建と社会事業の重要性、経済民主主義
・第九章：女性解放
・第十章：民主革命における労働組合の使命

B．「社会革命と精神革命」の「序」（263-264 頁）

・「地震は破壊し、春風は蕾を温める。」
　　日本の両面、後者への信頼
・日本の没落、倒れるべき運命、軍閥
・「日本は再生するために、倒れたのだ。日本は、倒れたことによって、一人前になるのだ。」　cf.イスラエル（霊性の復活を無視）
・「日本がもし唯物主義といふ新しい偶像と、唯物弁証法といふ神否定の迷路に陥るなら」
・「誇るべきは、良心と霊性に於ける、発明と発見の力だ！」
・自然から学ぶ
・「再生は日本を待つてゐる。今は日本の繭造り日だ！」、「日本の若き魂よ、大能者の呼びさまし給ふままに、もう、眼をさましてもよいであらう。」
（1947.10.15。武蔵野の一隅）

・詩的文体